

市長記者会見記録

日時：2015年1月5日（月）午後2時～午後2時39分

場所：本庁舎2階 講堂

議題：平成27年の年頭にあって

（話題提供）スポーツ特別賞贈呈について（市民・子ども局）

麻生区「子育て支援アプリ」実証実験を開始します。（総務局）

<内容>

（平成27年の年頭にあって）

司会： ただいまより、定例の市長記者会見を始めさせていただきます。

本日は、平成27年の年頭に当たりまして、市長からご挨拶させていただきます。また、スポーツ特別賞の贈呈について、川崎市麻生区「子育て支援アプリ」の実証実験についての2件の話題提供をさせていただきます。

それでは、市長、よろしくお願ひいたします。

市長： 皆さん、新年明けましておめでとうございます。本年もどうぞよろしくお願ひいたします。

今年、市長になってから2年目ということになりますので、昨年取り組んできた、着手できたことについてはしっかりと成果を出していく、そして、まだ着手できないものについては、しっかりと着手をして進捗を図っていきたいと思っています。

昨年、ご案内のとおり、待機児童の解消に向けての大きな結果が出せたのかなと思いますし、中学校給食についても一つの方向性が出せたので、それはよしとして、まだできていないことについても、これからしっかりと取り組んで、一つ一つ市民の皆さんにお約束してきたことをしっかりとやっていきたいと思っています。

一方で、最近、口を開けば財政状況が厳しいということを言わざるを得ない状況になっておりますけれども、市民の皆さんは財政状況がなぜそんなに苦しいのかということ、なかなかおわかりにならないというか、実感が湧かないんじゃないかなと思っています。これだけ、人口も146万人を超えるということにもなっているし、全国から見ても非常に若い都市だし、元気もあるし、産業の誘致もしっかりできている。それでいてなぜこんなに厳しいのかということがなかなか、他の都市はもっと厳しいんじゃないのと、うちがなぜこんなに厳しいのかというふうな感覚が若干あるんじゃないかなと思います。

地方財政制度の話とか色々難しいことはあるんですが、しかし、他の都市と比べて

どうだということよりも、川崎市がこれからも持続的に発展していける、そういったことをやっていくためには、いつも言っているんですが、量的なものというよりも質的な転換を図っていかなくてはいけないと思っております、今朝は職員に対する私の年頭の挨拶の中で、市役所を定食屋さんに例えて、豚カツを今まで5切れ出していたのが4切れになるかもしれない、量は減るけれども、全体としての質というものを、お客様にしっかりと満足いただけるもの、かつ、それが例えば4切れになっても健康にいいんだというか、なぜいいのかということをしかり市民の皆さんにわかっていただけるような、そういう改革をやっていかなくてはいけないなと思っております。

来年度、来年3月までということになりますけれども、実質的には、今年新しい総合計画と行財政改革計画というものをしっかりとつくっていくということになりますから、その議論の過程で、しっかりと情報を市民の皆さんと共有しながら、そして目指すべき社会というのを、川崎市というのはどういうものかということを含めて情報共有して、課題に果敢に挑戦していく。私がよく申し上げる、川崎らしさとはチャレンジスピリットであるということ、私をはじめ職員一丸となってやっていきたいと思っております。

その意気込みを申し上げて年頭の挨拶とさせていただきたいと思っております。よろしく申し上げます。

それでは、昨年の暮れから年始にかけて、川崎市にとってとてもうれしいニュースが相次ぎました。

1つ目は、川崎フロンターレの大久保嘉人選手の2年連続のJリーグ得点王ということでございます。単独でのJ1リーグ2年連続得点王は史上初の快挙となります。大久保選手は今年もフロンターレでプレーすることが決まりましたので、ぜひ3年連続の得点王とともに、悲願のリーグ制覇に導いていただきたいなと願っております。

2つ目は、つい一昨日のことですけれども、アメリカンフットボールの富士通フロンティアーズの日本一でございます。私も観戦させていただきましたが、創部30年目にして初めてのタイトル、悲願のタイトルということでありまして、大いに勇気づけられたところでございます。

川崎市民に大きな喜びと感動をもたらしてくれた大久保選手と富士通フロンティアーズの皆さんの活躍をたたえて、川崎市からスポーツ特別賞を贈呈させていただきたいと考えております。

次に、もう一つ情報提供がございまして、麻生区における子育て情報発信の実証実験についてでございます。

昨年2月に富士通株式会社様との間で締結いたしました包括協定に基づくオープンデータ活用の取組の一環といたしまして、スマートフォンなどモバイル端末を活用した子育て情報発信の実証実験を行います。

具体的な内容といたしましては、スマートフォン向けアプリを活用して子どもの年齢や居住地などといった情報を登録いただくことで、利用者が知りたい子育て情報を地図情報などと連携し、的確かつタイムリーに提供するサービスでございます。

実証実験は明日の1月6日から2月28日までを予定しておりまして、麻生区にお住まいのスマートフォンをお持ちの方で、日ごろから子育て関連のイベントや施設を利用されている保護者の方にご協力いただき実施いたします。

私からは以上です。

(スポーツ特別賞贈呈について)

司会： 次に、質疑応答に入らせていただきます。話題提供も含めまして質疑はお願いいたします。

これからの進行は幹事社さん、よろしく申し上げます。

幹事社： では、幹事社からまず申し上げます。

市長： はい。よろしく申し上げます。

幹事社： 話題提供のほうからです。大久保選手は得点王も2年連続ですけれども、スポーツ特別賞のほうも2年連続かと思うんですが、これは市では過去にあるんでしょうか。

市長： いわゆる2年連続という形でしょうか。

幹事社： そうですね。あと複数回について。

市長： 複数回は過去にございますが、2年連続というのは初めてです。

(麻生区「子育て支援アプリ」実証実験について)

幹事社： 次に、子育て支援アプリなんですけれども、よくわからないので伺うんですが、Wi-Fi化の話で出てきている川崎市アプリ、これとも関係していくものなのでしょうか。

市長： 実は、全く一緒のものではございませんけれども、非常に参考になる例じゃないかなと思っています。今回は子育てに関するアプリということになっておりますが、私どもの考えている川崎市アプリというものはもう少し総合的なものになると考えております。それにしても、私も体験版というか、そういうものをちょっと見させ

ていただきましたけれども、非常に参考になる例だと思いました。

幹事社： これは子育て中の方向けなんですけれども、保育園の空き情報とか、そういったものもアプローチできるんですか。

市長： 保育園の空き状況はこれには入っていないです。

幹事社： わかりました。ありがとうございます。

幹事社： 同じく幹事社の共同通信です。子育て支援アプリについて2点なんですけれども、まず1点、どうして麻生区なのかということをお伺いしたいのと、もう1点、ほかの自治体でもこうした子育て支援アプリというものはあるのかということ、2点お願いします。

市長： まず、麻生区を選定した理由についてでございますけれども、麻生区の区民会議において、子育て情報発信の課題を検討しておりまして、特に子どもの年齢に応じたイベントや、居住地の近隣で開催されるイベントの情報が探しにくいと。また、行政と民間事業者が発信する情報をまとめて知りたいという要望がございまして、タイムリーでわかりやすい情報発信の手法を検討する上で条件が一致したということございまして、先ほど申し上げたように富士通さんとは包括協定を結ばせていただいているということで、こういったところで一致したということでございます。

それから、他の都市ということでもありますけれども、企業との連携ということでオープンデータの仕組みを利用して、同じようなスマートフォン向けアプリを活用した取組は、横浜市や福井県の鯖江市などで進められておりますが、その数はまだ少ない状況と伺っています。

(行政サービスの質について)

幹事社： 年頭なので聞きますけれども、昨年よりは福田カラーに関心が高まると思われる新年度予算の議会が間近にあります。また、この1年は新総合計画が大詰めとなります。それぞれについて、福田市政だからこそ用意できる市民にとって好ましい、プラスになるような具体的なポイントで、この年頭、年の初めに示せるものがありましたらお願いしたいのですが。

市長： 改めてこれから市長復活がございまして、その中でどういうふうに市民の皆さんとお約束したことが具体的にできるのかということ、財政状況等、最終的にバランスを考えなくてはいけませんので、その中でしっかりとお示ししていきたいなと思っています。

幹事社： わかりました。

市長： 現時点では済みません。

幹事社： ありがとうございます。先ほど紹介された話で、職員への挨拶でも触れられた「質の転換」という言葉がありまして、これまで「スクラップ・スクラップ・アンド・ビルド」とおっしゃっていて、それで言葉を出されて誤解を招かないようにされているのかなと感じたんですけれども、質と言われても、じゃ、市民が安心できるほどのものなのかはちょっとわかりにくかったので、果たして実質のサービス減をなるべくそうは感じさせないようにというレベルの話なのか、それとも見かけのサービス量は減っても質が大幅によくなることで、実質、市民にとっては生活がよりよくなることを目指す、そこまでの市民にとってわかりやすい質のアップを目指すのか……。

市長： 私もこういう言い方をしていますから、ざくっとした話になってしまわざるを得ないんですけれども、これから具体的なものになってくると、一つ一つの事業で質というものが、そういうふうなものじゃないと、なかなかイメージで話していても、市民の皆さんが、「じゃあ、どこが？」、「何の事業が？」ということになると思いますので、個別具体的な事業一つ一つを見直していく中で、一つ一つの質というものを徹底的に考えてやっていかなければならない、そういう視点で見直していかなくてはならないなと思っています。

幹事社： そこで求める質というのが、現状から低下したと感じさせないようにというレベルなのか、現状よりもよいものだと……。

市長： 何をもってということになると思うんですが、例えば金額ベースという話だけのことを考えると、それが低下したからといって、それが即、実質的なというか、感覚的に低下したのかというと、多分、一概にはそう言い切れないんだと思います。また、その逆もあるかもしれません。要するにトータルとして、例えば支援が必要のところにはしっかりとした支援が公正な形でしっかりと届くようにというのをやっていかなければならないと思います。

例えば補助金、この前、行財政改革に関する専門家の皆さんからの中間報告をいただきましたけれども、そのときも、例えば補助金一つとっても、40年前から続いている補助金が非常に多いとか、あるいはこの10年で新しくできたものが多いというものもあります。そういったところをしっかりと見直す中で、本当に必要なものというのはどういうことなのか、市民目線に立って限られた財源の中でやっていくということをやっけていくということで見直していくということでもあります。

幹事社： 伺っている限りはよいイメージなので、総体としてはアップを目指すを受けとめてよろしいですか。

市長： 何をアップするのかということによると思うんですけども、おっしゃる意味が額という話を言っておられるのか……。

幹事社： いえいえ。市民の満足度です。

市長： それを目指して頑張っていきたいですね。決して金額でアップとかダウンということではなくて。

幹事社： わかりました。では、各社からお願いします。

(小児医療費助成事業について)

記者： 今の話とちょっと関連ですけども、市長復活がこれからということなのでおっしゃりづらい部分もあると思うんですが、新年度予算の規模は大体どれぐらいになるのか、前年並み、前年よりやや上、やや下、それぐらいの範囲でお答えをいただければと思うんですけども、どうでしょうか。

市長： それも、やはりある程度、復活のところで前後しますので、今のところは何とも申し上げられないなど。

記者： なるほど。あともう一つ、先ほど市長がおっしゃられていた給食とか待機児童では大幅に方向性が決まったと思うんですが、一方で積み残したのものもあるというお話だったんですけども、そのうちの一つで、市民の方に大変関心があるのは小児医療費の無料化の拡大だと思います。

ただ一方で、これは厳しい財政状況の中で多額の経常経費がかかることが間違いなくて、何かを削ったりしないとこれを導入するのは難しいと思うんですが、市長ご自身も小さいお子さんが3人いらっしゃるのでおわかりになるように、これは絶対望まれているものだと思います。これを来年度中に実現できるのかどうなのか、いつとまではお伺いしませんので、来年度中というようなくくりではいかがでしょうか。

市長： これも繰り返しの答弁になって恐縮なんですけれども、やはり最終的に市民のニーズが高いことも承知していますし、また私自身も非常にやりたい、かつ、それ以前に市民の皆さんにお約束したことの一つでありますから、その意気込みは持っています。

一方で、財政状況という、まさにおっしゃっていただいたところとどう兼ね合いをつけるかというのは、まさに現在進行形というか、やっているところでありますので、いつから始めるというのは、現時点では申し訳ありませんけれどもお答えすることはできないと。ただ、何とか頑張りたいという思いはございます。

記者： 今、市長がおっしゃられたように、これは市民とのお約束ということなので、

要するに、やるかやらないかといったら、結論としてはやるしかないと思うんですよ。やらざるを得ないというか、積極的にやりたいというお気持ちがあるんだったら、もうちょっとポジティブな意味でやるということだと思えるんですけども、それは財政状況がどうあろうと、市長がそれをわりと上位に掲げて、子育てをプライオリティーの一番上のところに置いて政策をやっているということは市民の誰でも知っているわけですから、これはその中で非常にプライオリティーが高い政策だと思えます。そうすると、財政状況を見ながら導入を決めるかどうかというのは、ちょっとどうかかなと思うんですけども。

市長： いや、いずれにしても、これは財政状況を考えないでやる政策なんて一つもないので、そこは財政を置いてなんていうことは、どの施策、どんなにプライオリティーが高くても、それは議論として成り立たないので、そこはあくまでも財政とのバランスを見ながら、プライオリティーが高いことは間違いないと思えますけれども、最終的な判断というのはどうしても財政状況との見合いということになると思えます。

記者： 済みません。ちょっとしつこいですが、そうすると、市長が1期目の任期でいらっしゃる4年間のうちに、やらないというオプションもあり得るということですか。

市長： 現時点でまさに今その、先ほど申し上げたように何とかならないかという形で、できるだけ早くやりたいということで、議会でも何度も答弁しているとおりでありますけれども、現在進行形でやっているところですので、今、何とも申し上げられないんですが、やっている途中でできなかつたとか、そういうふうな、できないことを前提に私は考えておりません。何とかできるように色々な調整をしていきたいなと思っています。

記者： 大事なことなので、くどいですが確認させてください。4年間でやらないこともあり得るということですか。

市長： そう捉えられると、そんなことはちょっと……、僕はこれまで議会でも答弁しているとおりで、全ての公約に対して実現するように最大限の努力をするということをおし上げておりますので、その姿勢には一切変わりはありません。ただ、その中でいわゆる優先順位をつけてということは申してきておりますので、そのバランスの中でやっていくべきものだと思います。

記者： なるほど。私ごとですが、うちも冬になって子どもがいっぱい風邪を引いて、小さい子は川崎でも無料ですけども、医療費の無料化というのはありがたいものだなというのを親になってしみじみ感じるんですね。市長も子育て中なので、おそらく

そういうことはお感じになられていると思うんですが、今の財政状況の話と見合わなければならぬというのは当たり前のことですが、ただ、特にこういう時期になって、これからインフルエンザも流行期を迎え、まさにピークを迎えるというところで、こういう時期に子どもたちを抱えながら、何とかしたいな、ああ、お金かかっちゃうなと思っているお母さん、お父さんたちにとってみると、あれっ、福田さんに入れたんだけど4年間のうちにやらないのかなと、歯切れ悪いなと思われちゃうと損だなと思っただけです。

市長： 要するにちょっと質問が、4年間にやらないということもあり得るんですかという話は、それは質問の前提として僕はちょっと違うと思っただけで、今までも申し上げているとおり、全ての公約について全力で取り組むということで、プライオリティーも高い政策だと申し上げてきております。

記者： それは4年間のうちには必ずやるということですか。

市長： もちろん、だから4年間の中での公約だということを繰り返して言っていますので。

記者： ただ、それが来年度になるか、最終年度になるかということは、まだこの段階ではおっしゃれ……。

市長： 今日の段階では申し上げることはできないですね。

記者： わかりました。済みません。

市長： いえ。

（待機児童対策について）

記者： 待機児童の話ですけれども、昨年の今頃の会見で市長は、2015年4月に確実にゼロにするとおっしゃっておられます。この点については現在、見通しというか、それに変わりなければ変わらないとおっしゃっていただければいいんですが、いかがでしょうか。

市長： 目標について変わりはございません。

記者： 目標……。

市長： 目標というか、ゼロにすることを言っておりますので、その実現に向けて、今、全力で取り組んでいるところです。

記者： ゼロは必達ということですか。

市長： はい。

記者： 今も変わらないと。

市長： もちろんです。

記者： 現実的にもおそらくそうなるであろうということなんでしょうか。

市長： こればかりは何とも、最終時点になってみないとわかりませんが、今、それこそ本当に去年もそうでしたが、お一人お一人をケアするという状態でやっていますから、何とか頑張りたいと思っています。

記者： ありがとうございます。

(水素エネルギーについて)

記者： よろしいですか。突然、ちょっと水素エネルギーの関連で伺いたいんですが、今年、市の臨海部で水素発電所の建設ですとか、あと東芝との共同実験も始まります。水素プロジェクトという北九州ですとか愛知が盛んに行っているんですが、市長はそうしたほかの都市と比べて川崎市の優位性をどのように捉えていらっしゃるかと、水素エネルギーに関する期待のコメントをいただければと思います。

市長： 今おっしゃっていただいた他の自治体でも、水素のところで一生懸命取り組んでいる自治体がいっぱいありますが、ほとんどが、ある意味全てがと言っていいと思いますが、水素の利活用のところがメインになっています。川崎が他の自治体と違うのは、まさに発電というところから始められる、一番最初の入り口のところから最後の利活用まで、一連のサプライチェーンができるというところに川崎の強みがあると思っています。

一部報道で、今日も東京五輪の選手村が水素タウンみたいになるというふうには書いてありましたが、今年の駅伝なんかを見ますとトヨタ社のMIRAIが伴走していたり、あるいは東芝さんのCMで「川崎」と流れたりとか、いかにも水素元年というのを印象づける年の始まりじゃなかったかなと思っていますから、まさにそのフロントランナーに川崎がなれるように頑張っていきたいと思っています。

記者： ありがとうございます。

市長： 名称も考えようと思っていまして、少し分かりにくいと思って、川崎が水素のことに一生懸命取り組んでいる、もう少しわかりやすいキャッチが何かないかなと思って、今みんなで知恵を出し合っているところです。

記者： それはいつごろですか。

市長： 頑張って早くやらなきゃなと思っています。

記者： はい。ありがとうございます。

（特別秘書の設置について）

記者： 特別秘書制度については、年は明けたんですけれども、去年9月の議会でああいう形になって、12月では何も音なしだったんですが、年明けて新年度、あるいは今度の予算議会もあります、どのように今のところ考えていらっしゃるって、何かめどというか、考えていらっしゃることはありますか。

市長： いや、現時点ではまだ何も、年末から何の進展も特にありませんし、何か変化があったということでもございません。

記者： ただ、必要性については非常に、もともと……。

市長： そうですね。

記者： 欲しいということなんでしょうけれども、提出の時期だとか、そういったものについて。

市長： 時期については、特にまだいつ出すかというのは考えていません。

幹事社： 議会へのアプローチにも変化がないということですか。

市長： アプローチについては、詳細は避けますけれども。

幹事社： 結構です。

記者： そういう意味では、もう、していらっしゃるということでもいいんですか。

市長： 折を見てですね。その必要性については十分理解いただいているんじゃないかとは思いますが、そういう意味では少し今後の話ですね。

記者： 今度、2月の定例会に、予算議会に出すというような考えはないということでしょうか。

市長： はい。現時点では。

（年末年始の過ごし方について）

記者： 今年の年末年始は非常に長い休みというか、世の中的には9連休というような形だったんですけれども、市長自身も、動向等を見る限りでは、公務はこの間のアムフト以外はそんなになかったと思うんですが、どのように年末年始を過ごされたんですか。

市長： 年末は結構ぎりぎりまで挨拶に回っていたりとか、年始は初詣でと家族で過ごしたという感じですね。

記者： 初詣では例年どおり琴平。

市長： 例年どおりいつものところで。

記者： おみくじはいかがでしたか。

市長： おみくじは大吉でございました。

記者： またですか。

市長： また今年も大吉でございました。

記者： 3年連続。

市長： はい。そうですね。何ですかね。ついていますね。

記者： おとしは大吉が出て市長選初当選という非常に大きなものがあって、去年の大吉というのは何が自分にとって大吉だったのでしょうか。

市長： 1年目の年でありましたけれども、職員の皆さんとチームワークよく1年間仕事をやってこれたというのが、私にとっては本当に大吉だったなと思っています。

記者： 今年1年の大吉は、自分のどの辺にいいことがあるというか、これがあったらいいなど。

市長： これがあったらいいなですか。何でしょうね。今年の初詣でのときも、とにかく自然災害なく市内安全にみたいなことをお願いしてきたので、とにかく川崎市のみならず日本全体も、あるいは世界も、ちょっと大きな話で、格好つけたような話ですけれども、安泰であればいいなと思っていますし、その中で、川崎市として貢献できることというのをしっかりやっていければいいなと思っています。

(3副市長の今年の抱負について)

記者： 市長、せっかく3副市長がいらっしゃっているので、何か一言ずつ。

市長： そうですね。私も今日、年始ってこういう感じでしたっけと思って。

記者： 今回マイクも用意されているので、お言葉いただければと思うんですが。

市長： そうですね。じゃあ。

記者： いいですよ。

市長： どうぞ質問してください。僕が言うにあれですが。

記者： 3副市長に会見でお話をいただく機会はめったにないもので、大変恐縮ながら一言ずつ、それぞれ今年というか来年度、今年度はもうそろそろ終わりなので、来年度に向けての抱負みたいなものと、あと、色々な多岐にわたる分野をご所管なされていて大変だと思うんですけれども、その中でもあえて今年、あるいは来年度、これに力を入れてやっていきたいというものがあったら、ぜひ砂田さんから順番におっしゃっていただくと大変勉強になるんですが。

砂田副市長： 市政については、市長の年頭の挨拶にあったとおり、非常に財政状況が厳しい中で、市民の皆さんに総合的に納得していただけるような改革、オープンイ

ノバージョンと市長はおっしゃいましたけれども、それについてどう取り組んでいくか、何といても市民の皆さんが納得していただけるような改革をとということを肝に銘じて取り組んでいきたいと思っています。

三浦副市長： 私のほうも、総じて財政状況は非常に厳しいと、基本的にはそういうような状況がある中で、改めて様々なセクターの皆さんと協働の取組をしていくというのが非常にこれから大事になるんじゃないかなと。周辺の自治体ももちろんそうですし、企業さんやNPO、あるいは大学等といったような多様な主体と、様々な課題に取り組んでいくことが大事じゃないかなと思っています。

あとは、今日も市長のほうから話がありましたけれども、臨海部の色々な意味のライフサイエンスの関係ですとか、あるいは水素を含めたエネルギーといったような取組、やや一歩前に出ていくような取組についても、川崎らしい取組を進めていければなと思っています。

菊地副市長： いつの時代も、最近、何を読んでも少子高齢化ということで、特に今質問も出ていましたけれども、保育の待機児の問題、または何回もご質問があった小児医療費、そういった市長の思い、また市民のニーズ、なるべく前向きに一生懸命やっていきたいと。

あとは、高齢化では特に地域包括ケア、これは2025年を踏まえた、あと10年近くになりますけれども、この構築がいかに大事かと。特に社会保障料が非常に上がっている、所得は伸びない、そういう中で本当に、質というお話もございましたけれども、そういうものを担保しながら進めていければと思います。よろしくお願ひします。

記者： ありがとうございます。

(市内で活躍するスポーツ選手・団体に関する所管について)

記者： スポーツ特別賞に話が戻ってしまって申しわけないんですけども、市長はフロンターレの試合ですとか、フロンティアーズの試合をかなり観戦されていると思うんですが、市長の目から見た大久保選手の魅力、あるいはフロンティアーズの魅力を教えていただけるとありがたいんですが。

市長： 大久保選手の魅力は、点を取りにいくということにもものすごい闘志あふれる、ファイティングスピリットというか、果敢に挑戦していくという、あの意識というのはずば抜けているんじゃないかと思います。ああいうところが、何か勇気づけられるなど、昨シーズンになっちゃいますけれども、特に感じましたし、それが得点王に確

実につながっているなと思っています。

それから、フロンティアーズに関しては、Xリーグの決勝と今回のライスボウル、両方見に行かせていただきましたけれども、創部30周年の思いが詰まっている感じがあって、歴代の監督さん、ヘッドコーチだとかがいらっしゃいましたが、今回のことを待ちわびていたというか、お待たせしましたという言葉が飛び交っていましたので、何か皆さんの思いがぎゅっと詰まった、その思いが初優勝につながったんじゃないかなと思って、チームというか、会社というか、全部の総合力で、気合いで勝ったような感じがいたしましたね。すごい感動的でした。

記者： ありがとうございます。

記者： 市長、スポーツ観戦好きですよ。

市長： 好きですね。

記者： 年末の女子プロレスはどうでしたか。

市長： 女子プロレスは最高でした。

記者： 最高でしたか。

市長： 最高でした。ディアナさんや井上京子さんもそうですけれども、川崎のまちのイベントなんかにも非常に協力してくださっていて、女子プロレスの聖地の川崎体育館でああいうフィナーレを飾れて、川崎にとっても非常にいい、最後の川崎体育館の歴史を飾ってくれたなと思っていますし、これからも地元のディアナさんにぜひ地元のファンを増やしてもらいたいし、私も大いにファンになりましたし、盛り上げていきたいなと思うし、逆にディアナさんたちからも川崎のまちを盛り上げていただきたいなと思っています。

記者： ちょっと寂しいですね。いい体育館がなくなっちゃうのは。

市長： そうですね。それは本当に。有刺鉄線、あの爆発で、本当に最後のフィナーレではバーンって感じでよかったですね。

(麻生区「子育て支援アプリ」実証実験について)

記者： 子育て支援アプリについてもう一度お伺いしたいんですけども、麻生区で始めるということなんですが、明日からということ、これは、画面はどこかで見ることにはできますか。

市長： これは担当からお答えさせていただいてよろしいでしょうか。

ICT推進課担当係長： 総務局でございます。今のご質問なんですけど、アプリを使用していただけるモニターさんの募集を既に開始しておりまして、今日現在で100

名を超えているモニターさんの募集がございました。その方には、別途URLをお送りさせていただきまして、そちらにアクセスしていただくことでこのアプリが利用できるというような仕組みになってございます。

また、実証実験の途中でございましても応募が可能ですので、そういったご案内を本市のホームページ等々を含めてさせていただいているところでございます。

記者： 今回の実証実験で、今後はどういう展開になるかというのをもう少し教えていただけると。

市長： 今後の展開ですか。実証実験をやってみた結果がどう出るかということ、次の展開に生かしていくということなので、おそらくすごくいいものが、ちょっと試してやってみたんですけれども、これはすごい使い勝手がいいものだと思いますので、多分好評を得るのではないかなと。好評を得れば、次なる展開というのがまた考えられるんじゃないかと思っておりますので、今回は、こういう地域限定の形ですけれども、今後どういう形に発展していくかわかりませんが、私どもが今考えている川崎市アプリというのものにも色々な参考になるんじゃないかなと思っております。

記者： ありがとうございます。

幹事社： シンプルに、ほかの区にも広げていくとか、そういう話ではないですか。

市長： この実証実験ですか。

幹事社： はい。

市長： 実証実験は麻生区ということですか。

幹事社： その結果がよければほかの区でも考えていくというような、そういうシンプルな話ではないですか。

市長： これについては富士通さんという形の実証実験だから、これをだんだん広げていくという形ではないですね。あくまでも麻生区でという形です。

幹事社： わかりました。

司会： 質疑はよろしいでしょうか。

それでは、以上をもちまして、市長記者会見を終了させていただきます。どうもありがとうございました。

市長： ありがとうございます。

(以上)

この記録は、重複した言葉づかい、明らかな言い直しや質問項目などを整理したうえで掲載しています。

(お問い合わせ) 川崎市役所総務局秘書部報道担当

電話番号：044（200）2355